

「12使徒の選抜 - マタイ、トマス-」

§ 053 マコ 3 : 13~19、ルカ 6 : 12~16

1. はじめに

(1) 宣教の拡大のために、使徒たちを選抜し、彼らを各地に派遣する段階になった。

(2) 12使徒のリストは、4ヶ所に出て来る。

①マコ3章、マタ10章、ルカ6章、使1章

②同名の者、別名を持つ者などがいて、非常に難解である。

③4人一組で考えれば、分かりやすい。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

(§ 53) 徹夜の祈りの後、イエスは12使徒を選ぶ。

マコ 3 : 13~19、ルカ 6 : 12~16

(4) これまでに6人取り上げた。

①ペテロ : キーマン

②アンデレ : 紹介者

③ヤコブ : 天国への一番槍

④ヨハネ : 主が愛された弟子

⑤ピリポ : 哲学者

⑥ナタナエル (バルトロマイ) : イスラエルの型

(5) 今回は、第2組の後半の2人を取り上げる。

⑦マタイと⑧トマス

<12使徒の歌 (ルカ 6 : 14~16) >

1. イエスの使徒たち12人、彼らは全員20代、

1組4人で活動し、御国の福音伝えます。

2. ペテロが最初の長(おさ)となり、弟アンデレそこに付き、

ヤコブとヨハネの兄弟も、御国のために仕えます。

3. ピリポの組の者たちは、バルトロ、別名ナタナエル、

マタイ、もとは取税人、トマス、あだ名がデドモ(双子)です。

4. ヤコブの父はアルパヨで、シモンの前歴熱心党、
別名タダイのユダがいて、裏切り者のユダ最後。

2. アウトライン

(1) マタイ

- ①概略の紹介
- ②召命を受けた場面
- ③食事会の場面

(2) トマス

- ①概略の紹介
- ②イエスとともに死のうとした場面
- ③イエスのことばを理解できないと言った場面
- ④イエスの復活を疑った場面

3. 結論

- (1) マタイの性格
- (2) トマスの性格

このメッセージは、マタイとトマスの人生から教訓を学ぼうとするものである。

I. マタイ

1. 概略の紹介

- (1) 4つのリストの中で、位置が変わる。
 - ①7番目か8番目
- (2) マタイという名の意味は、「ヤハウエからの贈り物」である。
 - ①アルパヨの子レビ(マコ2:14)とある。
 - ②このアルパヨは、9番目に出て来るヤコブの父アルパヨとは別人である。
 - ③当時は、2つの名前を持つ人がいた。
- (3) 今までに登場した使徒たちは、バプテスマのヨハネの弟子であった。
 - ①マタイは、バプテスマのヨハネの弟子ではなかった。

(4) 彼の職業は、取税人であった。

- ①カペナウムで関税(通行税)を徴収する取税人であった。
- ②ローマの官吏ではなく、国主ヘロデ・アンテパスに仕える取税人であった。
- ③税額を前納し、それ以降取り立てたものとの差額が、収入になった。

(5) 彼は相当な教育を受けていたであろう。

- ①アラム語
- ②ギリシア語

2. 召命を受けた場面

「イエスは、そこを去って道を通りながら、収税所にすわっているマタイという人をご覧になって、『わたしについて来なさい』と言われた。すると彼は立ち上がって、イエスに従った」(マタ9:9)

(1) マタイは、イエスの権威を認識した。

- ①突然起こったことではない。
- ②収税所は、情報の収集センターのようなものである。
- ③さらに、イエスは取税人や罪人たちの間で評判がよかった。

(2) これは、徹底的な従順である。

- ①ルカ5:28
「するとレビは、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った」
- ②マタイの福音書には、「何もかも捨て」という言葉はない。
- ③マタイにとっては、後戻りできない献身であった。

3. 食事会の場面

「イエスが家で食事の席に着いておられるとき、見よ、取税人や罪人が大ぜい来て、イエスやその弟子たちといっしょに食卓に着いていた」(マタ9:10)

(1) それからしばらくして、マタイは自宅で宴会を開いた。

- ①霊的新生を感謝する会である。
- ②古いマタイには考えられないような、気前のよいことが起こっている。

(2) 招かれた客

- ①イエスと使徒たち6人
- ②取税人や罪人(娼婦)が大ぜい

(3) 「いっしょに食卓に着いていた」

- ①ユダヤの視点では、食事をともにすることは、親密な交わりを意味する。
- ②マタイは取税人としての特権や富を捨てたが、イエスを友とするようになった。

(4) これ以降、マタイの記録は福音書には出てこない。

II. トマス

1. 概略の紹介

(1) 彼もまた、バプテスマのヨハネの弟子ではない。

(2) トマスという名前の意味

- ①双子（彼には双子の兄弟がいたのであろう）
- ②ギリシア語でデドモという。
- ③恐らく、ギリシア人との付き合いではデドモと呼ばれていたであろう。

2. イエスとともに死のうとした場面

「そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。『ラザロは死んだのです。わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいますが。さあ、彼のところへ行きましょう』。そこで、デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間に言った。「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか」(ヨハ11:14~16)

(1) ラザロは死んだ。

- ①イエスがその場に居合わせなかったのは、よいことであった。
- ②ラザロを生き返らせることで、人々の信仰をかき立てることができるから。

(2) しかし、イエスがユダヤ地方に行くのは、危険なことであった。

- ①指導者たちが、イエスの命を狙っている。
- ②もしイエスが逮捕され、殺されたなら、弟子たちも同じ目に会うだろう。

(3) トマスは、他の弟子たちを鼓舞してこう言った。

「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか」

- ①彼には、イエスに対する熱烈な愛と献身の思いがある。
- ②しかし、これは信仰の言葉ではない。
- ③これは、絶望の言葉である。

④情熱が、ペテロとは正反対の方向に向かう。

(例話) 盤面を見ているだけで、負けたと思った棋士

(4) トマスにはその意識がなかったが、ここにはアイロニー(皮肉)がある。

①彼は、イエスの贖罪の死の意味を理解していなかった。

・イエスは、ラザロの命と引き換えに、自分の命を犠牲にしようとしていた。

②後に、ほとんどの弟子たちが、殉教の死を遂げるようになる。

3. イエスのことばを理解できないと言った場面

『わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。わたしの行く道はあなたがたも知っています』。トマスはイエスに言った。『主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう』。イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません』(ヨハ14:3~6)

(1) 弟子は、ラビの教えが分からない場合は、質問をした。

①ここでは、12使徒全員が不思議に感じている。

②トマスが、群れを代弁して質問している。

(2) イエスの素晴らしい回答が与えられた。

①イエスはこれまでも、弟子たちに救いの道を教えて来られた。

②再度、確認される。

・救いの道はひとつだけである。

・イエスだけが救いの道である。

・イエスは、道、真理、いのち、そのものである。

4. イエスの復活を疑った場面

「十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らと一っしょにいなかった。それで、ほかの弟子たちが彼に『私たちは主を見た』と言った。しかし、トマスは彼らに『私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません』と言った。八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らと一っしょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って『平安があなたがたにあるように』と言われた。それからトマスに言われた。『あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい』。ト

マスは答えてイエスに言った。『私の主。私の神』。イエスは彼に言われた。『あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです』(ヨハ20:24~29)

- (1) トマスがなぜ他の使徒たちと一っしょにいなかったのかは、分からない。
- (2) トマスの疑い
 - ①他の使徒たちが何かを見たことは否定していない。
 - ②彼は、イエスが復活の体を持たれたことを信じなかった。
 - ③それを信じるためには、触って確かめてみる必要がある。
- (3) イエスは、その言葉を聞いておられた。
 - ①8日目に、復活のイエスが現れた。
 - ②トマスは、「私の主。私の神」と叫んだ。
 - ・これは、トマスの信仰告白である。

結論：

1. マタイは、「神からの贈り物」である。
 - (1) 彼は、人々の富を奪うために、自分の才能を用いていた。
 - (2) しかし、その才能は「神からの贈り物」であることに気づいた。
 - (3) そして、彼自身が、他の人に対して「神からの贈り物」となった。
 - (4) 福音書にはわずかしか登場しないが、イエスの行いと教えを観察していた。
 - (5) そして、マタイの福音書を後世に遺した。
2. トマスは、「懐疑論者」である。
 - (1) 情熱家である。
 - (2) しかし、うつ気質の人であり、ものごとを否定的に見る人である。
 - (3) その彼の人格もまた、完成へと導かれた。
 - (4) ヨハネの福音書の2つの流れ
 - ①不信仰の拡大→最後は、イエスを十字架に付ける。
 - ②弟子たちの信仰の成長→トマスの信仰告白がクライマックスになっている。
 - (5) トマスが疑った結果、私たちが信じることができるようになった。
 - ①復活を信じるかどうかは、弟子たちを信頼するかどうかにかかっている。
 - (6) 彼は、ガリラヤ湖畔で復活のイエスに出会った中のひとりである(ヨハ21章)。
 - (7) 彼は、聖霊降臨を待つ信者の群れの中にいる(使1:13)。